調査地　徳島県勝浦郡上勝町

調査年月日　2026 年 1 月 29 日

調査概要

■ 基本情報

面積：109.63 km^2

人口：1,281 人

人口密度：約 10.9 人/km^2

特徴：四国の町で最も人口が少ない自治体。徳島市の南西約 40km に位置する山間の町。

町の約 88%が山林で、標高 100〜700m に 55 の集落が点在。日本の棚田百選「樫原の棚田」など美しい原風景が残る。

上勝町のゼロ・ウェイスト政策は、日本の自治体の中でも突出して先進的で、世界からも注目されている取り組み。

■ゼロ・ウェイスト政策の主な特徴

1. 「焼却も埋立てもできない」から始まった挑戦

上勝町には焼却施設も埋立地もない。だからこそ「ごみを出さない仕組みをつくる」という発想に転換したのが大きな原点。

2. 42 分別という徹底した分別システム

住民はごみを 45 種類に分別して持ち込む。これによりリサイクル率は 80%以上という日本トップクラスの水準に到達。住民の理解と協力で成り立っている。

3. 「くるくるショップ」での再利用促進

まだ使えるものを無料で持ち帰れるリユース施設。年間数十トンの物が再利用され、廃棄物削減に大きく貢献。

4. ゼロ・ウェイストセンター（WHY）の存在

ごみステーション兼学習施設。世界中から視察が訪れ、町の理念を発信する拠点になっている。

5.「2030 年までに焼却・埋立ゼロ」を掲げる明確な目標

2003 年に日本初のゼロ・ウェイスト宣言を行い、長期的なロードマップを設定。

6. 地域経済との連動（葉っぱビジネスなど）

ごみ削減だけでなく、地域の資源を活かした産業づくりにもつながっている。「いろどり」のような成功例が、町の持続性を支えている。

■主な質疑応答

Q　町民からの反発はなかったのか

A　当初はあった。だが、役場職員が 6 週間で説得した。

Q　住民によって捨て場への距離が違う。不公平感はないのか

A　昔からの習慣。当たり前の感覚でやっている。

Q　センターにはホテルもあるが経営状況はどうか

A　５割稼働で順調に推移している。外国人利用者も多い。

■所感

・上勝町の面白いところは、「環境のために我慢する」ではなく、暮らしの質を上げながらごみを減らすという発想で取り組む点にある。その背景にはごみパッカー車が狭い市道を通行できないこと、市民が遠くても自らごみを運搬する習慣、焼却処分が財政上や環境への影響から困難だったことがあったという。ピンチがチャンスを生んだといえるかもしれない。その稀有な取り組みをまちづくりやブランドづくりに転換させている。我々が伺った際にも、東京の銀座にオフィスを構えるデザイン会社の一行にも遭遇した。山間部の小さな町の先進性に驚くばかりである。上勝町のように他市のまねごとではなく、伊勢原市の環境や未来のために必要なこと、持続可能なことへの取り組みが市民の豊かさや誇りに繋がることを再認識した。

・今回の視察を通じて、上勝町の成功は単に分別数の多さにあるのではなく、住民参加を中心に据えた仕組みづくりにあることを強く感じた。リサイクル率やごみの行方を「見える化」し、住民と共有することで行動変容を促している点は、他自治体にとっても参考となる。さらに、リユースショップやアップサイクル事業が地域経済と結びつき、環境施策が地域活性化にも寄与している点は、持続可能な政策形成の重要な視点である。ゼロ・ウ

ェイストという理念は、完全な達成が容易ではないものの、理想を掲げることで地域の結束を生み、行動を変える力を持つ。今後、藤沢市においても、地域特性に応じた住民参加型の環境施策の構築や、成果の見える化、地域経済との連動など、上勝町の取り組みから学ぶべき点は多いと考える。

・すべてにおいてこの町は、町民こぞって脚光浴びる仕掛けを創出し、生き方を創造していることに、生き方の面白さを感じ取りました。日本初の「ゼロ・ウエイスト宣言」を行い、全国に発信している町の姿は、神々しいとすら受け止められ、本市への参考としてはハードルが高いなぁと自戒を込めて噛みしめました。　伊勢原市民同一意識で解決へと向かう議論へとたどり着く困難な道筋、市民が運ぶごみステーションへの運搬への危険度、本市は国道県道や自動車道がある中での運搬への安全性、リデユースする生活感覚の共通性への議論、等、クリアする案件が桁外れの問題が山積みで凄すぎる。今回の視察は、まざまざと現実を聞き現風景を見て、その追い込まれた上での解決点にたどり着いた上勝町の皆様方の心意気に感動すら覚え、その取り組みと町民を思う町役場の方々のご心労・苦労には感謝と尊敬しかありませんでした。上勝町の皆様方に拍手を送りたい。ありがとうございました。

・ゼロ・ウエイストの考え方は、無駄や浪費をなくし、ごみを焼却したり、埋め立てたりせず、最終的には、ごみをゼロにすることを最終目標とする考え方・活動ではあるが、人口が１０万人を越える本市で実行するには、多くの困難が予想される。ゼロ・ウエイストの実現には、技術的なリサイクルの限界、初期投資コスト、市民の高い意識変容等、社会、経済、技術的な課題が存在する。このような課題が存在することを念頭に置くと、近年、ごみの減量化、資源化に堅実に努めて成果を上げている本市では、市民から多様化した意見や異論が出されることが予想され、また、ゼロ・ウエイストシステムを導入することにより、現在のごみ処置システムの大幅な改変が求められること等から、その導入に対しては、大きな不満が出ることが予想される。しかしながら、ごみの減量化、資源化は、地球環境改善のために、絶対必要条件となっているので、今後も、市民、事業者、そして行政が一体となって減量化、資源化になお一層励んでいかなければならないと、痛感した。

・今回の視察を通じて、ごみ減量化は環境対策にとどまらず、将来の財政負担の軽減や持続可能な行政運営にも直結する重要課題であることを再認識した。伊勢原市においても、これまでの処理中心型の発想から一歩踏み込み、市民・事業者・行政が一体となってごみの発生抑制に取り組む必要がある。上勝町の実践は、そのための方向性と覚悟を示すものであり、伊勢原市のごみ行政を考える上で極めて重要な示唆を与えるものであった。

・インターネットから得られた情報以上に、町民や実際に町を訪れている方からの声を聞く機会が持てたこと実際のところ、本音の部分を拝聴できたことは大変に有意義でありました。全国全世界から視察に見えられていることもあり、視察対応も予算が付いていて合同会社に委託されているのにも驚きました。視察当日も５組の対応をされていたようです。

調査地　徳島県徳島市

調査年月日　2026 年 1 月 30 日

調査概要

■ 基本情報

人口：約 243,000 人　明治 22 年に市制施行。

徳島県最大の都市であり、中枢中核都市に指定。

徳島県東部に位置し、四国一の大河・吉野川が市街地を形づくる三角州を形成。市内には眉山などの自然景観があり、都市と自然が近い環境。県庁所在地であり、政治・経済・文化の中心。

天正年間、蜂須賀家政が入国し徳島城を築いたことが起源。

阿波おどりが日本を代表する伝統芸能で、毎年 8 月に大規模な祭りが開催。藍染・阿波しじら織など徳島を代表する伝統工芸がある。すだち、阿波尾鶏などが徳島を象徴する特産品。

■眉山未来プロジェクトの主な特徴

徳島市の「眉山未来プロジェクト」は、徳島市の象徴である眉山（びざん）を“見る山”から“滞在して楽しむ山”へと進化させるための再整備プロジェクト。実証実験も進行中で、市民参加型の議論やイベントも活発に行われている。

1. プロジェクトの目的

眉山山頂周辺を「緑化重点地区」として再整備し、「見るだけでなく、楽しみながら滞在できる緑と景観のシンボル」 を目指す。徳島市の自然資源を活かし、観光・市民利用の両面で魅力を高める。市民参加型の議論を通じて、持続可能な活性化プランを策定する。

2. 主な取り組み内容

市民参加型ワークショップ「びざんミーティング」の開催。眉山の新しい楽しみ方を試す場を企画。

・キャンプ実証実験

・キッチンカー出店の実証実験

・イベント「眉山日和」の開催

・公式サイト「眉山日和」を開設（2025 年 10 月）。公式 Instagram「眉山日和」も運用開始。

・「グリーンスローモビリティ」の導入

■主な質疑応答

Q　中心市街地活性化策等への効果は

A　これから行う。眉山ローブウェイ山頂駅などの LED ライトアップ化など景観整備、阿波踊り会館前駐車場再整備など。

Q　広報戦略の内容や費用は

A　民間に委託。令和 7 年度で約 2500 万円。

Q　事業の狙いは

A　現在の滞在時間 15 分を 2 時間へ増やす。山頂にホテル誘致。夜間の滞在人口増も。

■所感

・徳島市の「眉山未来プロジェクト」は、まだ計画策定と実証段階にあるため、最終的な評価はこれからだが、「びざんミーティング」など、市民の声を計画に反映する仕組みが整っていることや、キッチンカー、キャンプ、イベントなど、小さく試して改善する手法は現代的で評価されよう。また机上の計画ではなく、実際の利用者の行動データを集める姿勢は堅実で共感を得やすい。伊勢原市でも大山をはじめとした、活性化策等を考えるときは大いに参考にすべきだし、市民全体の誇りの醸成やシンボルづくりも参考になるものがあった。

・現場で見られた市民協働の姿勢は、今後の自治体運営においても参考となるものであった。総じて、眉山未来プロジェクトは、自然・文化・交通・市民参加を総合的に結びつけ、徳島市が未来に向けて都市の価値を再構築しようとする意欲的な取り組みであると評価できる。中核市規模の自治体が地域資源を再編集しながら未来像を描くプロセスは、全国の自治体にとっても示唆に富むものであり、伊勢原市においても大山や里山資源などとの比較検討を通じて学べる点が多かった。

・本市大山地域でも小田急電鉄株式会社と株式会社エンジョイワークスが事務局を務め

「大山これから会議」が実施されているが、行政が主導しているわけでなく、賑わいを創出する仕組みを勝手連的に民間が実施している状況に留まっている。自ら実施できるだけの活力があるという事は大変良い事だと改めて今回の視察で実感をしたが、花火大会しかり大山観光しかりこの状況はいかがなものか。ビジョンを示したうえで、民間の資金や人材を活用し活力ある地域を創出していく必要がある。雑感だが、今回の眉山プロジェクトは担当課が公園緑地課で地域活性化や賑わい創出に関して言えばあまり興味関心が無いようにも感じた。議員がそういった指摘をしていなかったのか疑問だったが、議員は推進を望む声が多いと回答があったのみだった。インスタグラムなど広報も地籍測量も予算の中で包含して委託しているという回答で具体的に眉山をこうしたい、その結果徳島がこうなると言った情熱は感じられなかった。

・この「眉山未来プロジェクト」の恵まれた条件は、歴史的にも有名な武将蜂須賀小六時代から名城が街中にあり、市民の楽しみでもある山、高さ６００ｍほどで、眉山頂上には適度な平坦地があり、集う広さもあるという気安さもある条件は、恵まれた自然環境といえます。そういう意味では、この町の特色で眉山を「緑化推進重点地区」として再整備し、見るだけでなく、楽しみながら滞在できる「緑と景観のシンボル」を目指す観光の街～徳島市～を市民参加型の観光・市民参加の両面で魅力ある街に為す活性化プランは「本市でも真似のできる持続可能な活性化プランとして参考策定できる」視察効果のある出会いだったと感じ取った。

・本市においても、大山と中心市街地のなお一層の整備、活用を図ることで、観光客の更なる集客を目指し、その結果として、街の賑わいと、経済的な波及効果が顕著に出るよう、新たなプロジェクトを作成し、事業を展開していく必要性を強く感じた。

・眉山プロジェクトの視察を通じて、観光施策は「新たな施設を造ること」そのものよりも、既存資源の価値を再発見し、磨き上げ、継続的に発信していくことが重要であると改めて認識した。本市においても、大山という全国的にも知名度のある資源を中心に、周辺地域や市街地と連動した総合的な観光戦略を構築する必要がある。今回の視察で得られた知見を踏まえ、伊勢原市の実情に即した形で応用し、持続可能で市民にも誇りとなる観光施策の推進につなげていきたい。